

植物の知覚

——古典インドの自然観察より——

原 実

近年、国際的に熱帯雨林の伐採が地球の温暖化を惹起し、国内的にも地域開発の名に於いてなされる環境破壊が憂慮されている。又森林浴の奨励や、森林破壊の沿岸漁業への影響等順逆にわたる『樹木』への関心から環境問題が論じられるようになった。このような社会的状況から古典文献学者もこの種の問題に応分の関心を持つ事が期待される。

彼等はこの種の問題意識から再度文献を読み直すことによって古代人が『樹木』をどの様に考えていたかを考察しなければならない。その際仏典に言及される『山川草木悉有仏性』『草木国土悉皆成仏』の概念が先ず取り上げられるが、菩提樹下の仏陀成道、平家物語に謳われる沙羅双樹、更に又極楽世界の一切の願いを叶える如意樹(Hopkins 1910 pp.352-353)等のインド古来の樹木も我々に親しい。又、擬人法の発達した古代インドの詩はしばしば自然界を擬人化し、動植物も心を具えている如く描くから、擬人法その他を手掛かりに植物の知覚の問題を論ずる事も不可能ではない。これらの諸問題を踏まえて以下に古代インドの草木観の一端を論じたいと考える。

但しこの生物としての草木の問題は現在海外、就中欧州において多くの学者がそれぞれの関心に基づいて研究を進めているから、研究史を慎重に考慮する必要がある。蓋し研究史を無視して論文を公けにしても、それは所詮自己満足に終わり、研究の名に値いするものとはならない故である。筆者はもとよりこの分野の研究史をここに網羅すると潜称する者ではないが、近時英文でこの問題を論ずる間に(Festschrift P.S.Jaini) 西欧の研究史の一斑に触れる機会があった。研究史に即して研究を進めた結果、対象は自ずから特定問題に限られ、陳述も研究と言うより物語風となった嫌いがあるが、ここに本稿を世に問う所以のものは、識者の教示を得て当該問題により充実した文献目録を作成し、今後の研究に資せんとするに在る。

本文中、既述の英文論文に引用した梵文原典の原文は大幅にこれを省略し、新規に追加したもののみ注記に掲載した。尚、括弧内に引用している

書名、著者名は巻末の文献目録に対応している。

I

植物は人間や動物と異なって、一般に自らの生存の為に他の生命を害することのない唯一の生物であると言われ(Wezler 1987b p.131)¹⁾、その意味では真の『不殺生実践者』とされた。のみならず樹木は元来、雲、河水、善人と共に他を利するため(paropakaraṇārtha)に造られてあると言われる²⁾。それは唯単に消極的に他を害さないのみならず、より積極的に他を利するものであった。本邦の『寄らば大樹の蔭』という諺に象徴される様にしばしば人間に庇護と安全を保証して、後述する如く『利他行実践者』の模範とされた。

自分の生まれた地を離れる事なく、不動のまま(sthāvāra)に幾星霜、風雪に耐えては一年毎に細かい年輪を刻んで来た大木は、それなりの風格と威厳をたたえて、仰ぎ見る者に言い知れぬ感動を喚び起こし、それは又崇拜尊敬の対象となった(deva-dāru, Gupta p.7, rukkha-devatā, Coomaraswami p.63)。

他の民族にも見られる聖樹崇拜もインドに異質ではなかったが(Viennot 1954, Coomaraswami pp,62-82)、就中聖樹として古くから崇拜の対象となった樹木に Nyagrodha, Udumbara, Aśvattha, Plakṣa を数え(TS.3.4.8.4 Kane 2 p.894)、それらにCūtaを加えて後世Pañcabhaṅgaと称せられた。MS.4.39 は prajñāta vanaspati (Kullūka:mahāpramāṇa-jñāta-vṛkṣa) に対しては雄牛、バラモン等と共に右繞(pradakṣiṇa)の礼をなして通過すべしと説く³⁾。又、Nyagrodha樹にbhaktiを籠めて礼拝する者は殺バラモン罪よりすら解放されると言われる(Brahma Purāṇa 57.12-16)⁴⁾。文献を離れても、インドにおける最古のGaruḍa像といわれるSanchīのStūpa東門の中央まぐさには怪鳥GaruḍaがAśvattha樹を拜んでいる様が描かれている(Schlingloff p.379)。

但し、樹木そのものを信仰の対象とする『樹木崇拜』とは別に、『樹木』それ自体を神格化するというより、寧ろ樹木にはしばしば精霊が宿るとな

す考え方が存在した。或る Jātaka (465) は樹木の伐採に際して『樹神』に移転を要請し (Schmithausen 1991 p.15), 又 Bṛhatsamhitā 42.17-18 はインドラの旗を切り出す際, マントラを唱える事を命じ, そこには複数の『精霊』(bhūta) に転居(vāsa-paryāya)を依頼する文言が見え⁶⁾、同様の規定は入林儀式⁶⁾, 又 Mayamata の Vṛkṣa-saṃgrahaṇa 章にも見える⁷⁾。

II

(2-1) 古くからインドには現象世界は『動かぬもの』(sthāvara)と『動くもの』(jaṅgama)との二より成るといふ考え方が存在した(Slaje 1989, p. 153)。より古くそれは jagat/tasthus, sthāvara/cara, trasa/sthāvara, 又 Pali 仏典では tasa/thāvara と分類された(Schmithausen 1991 pp. 59-63)。『動くもの』とはもとより人間を含めた動物一般であるが, 『動かぬ物』の中には植物のみならず岩石等が含まれる。この中で草木を岩石と比較してみれば, 前者は後者と異なり成長繁茂するから, そこに生命のあることが知られる。但し古代インドには岩石にも知覚があるとす説が行われていた (Slaje 1989 pp.157ff and 1993 pp.254-256 and pp.265ff., Goudriaan p.100)。

(2-2) 『動かぬもの』としての植物は通常六分類され, 樹木に二種, 草類に四種を数えた。前者には花も実もある樹木 (vṛkṣa)と, 花がなくても実を結ぶ樹木(vanaspati), 又後者には薬草(oṣadhi), 雑草(trṇa), (樹木に絡まる) 蔓草 (latā), (地に這う) 伸草(pratāna)が含まれた。今, 叙事詩及び哲学文献よりそれぞれ一例を挙げれば次の如くである。

vṛkṣa-gulma-latā-vallyas tvaksārās trṇa-jātayaḥ: (MBh.13.99.23)
sthāvarās trṇauṣadhi-vṛkṣa-latāvatāna-vanaspataya iti
(Praśastapāda 33)

その他この六分類は MS.1.46-8, Amarakoṣa 2.4.6-9 にも言及されるが, 今それらを表示すれば以下の如くである。

MBh.13.99.23 MS.1.46-8 Praśastapāda 33 Amara 2.4.6-9 Caraka

- | | | | | | |
|-----|----------|-----------|-----------|-----------|---------------|
| (1) | vṛkṣa | oṣadhi | tṛṇa | vṛkṣa | vanaspati |
| (2) | gulma | vanaspati | oṣadhi | kṣūpa | vānaspatya |
| (3) | latā | vṛkṣa | vṛkṣa | latā | auṣadhi |
| (4) | valli | tṛṇa | latā | auṣadhi | vīrudh |
| (5) | tvaksāra | pratāna | avatāna | tṛṇa | (latā, gulma) |
| (6) | tṛṇa | valli | vanaspati | tṛṇadruma | |

(2-3) 仏教に在って植物は所謂『六道輪廻』や『五趣』の中に数えられなかったが、ウパニシャドの『五火二道説』には輪廻転生の経過点 (Durchgangsstadium: Schmithausen 1995 p.71) の一つとして植物が言及されている。但し後世ヒンズー教やジャイナ教に在ってそれは輪廻の一環となった (MS.12.42, Halbfass p.360, Jaini 1979 pp.108-111)。しばしば梵文文献で一切の存在世界を述べて『上は梵より下は草に到る迄』と称せられ (brahmādi-stamba-paryanta [MBh.13.16.53]), 草木はその最下位に置かれる。のみならず草木としての生まれ変わりは時に前世の悪行の結果であるとも見なされた。ここではマヌ法典の二句のみを引用する。

śarīrajaiḥ karma-doṣair yāti sthāvaratām naraḥ

vācikaiḥ pakṣi-mṛgatām mānasair antya-jātitām (MS.12.9)

『身体的悪行により植物, 言辞的悪行により鳥獸, 心意的悪行により賤民となる』 (cf. YS.3.131, Hopkins 1924, pp.245-246)

tṛṇa-gulma-latānām ca kravyādām daṁṣṭriṇām api

krūra-karma-kṛtām caiva śataśo guru-talpagah (MS.12.58)

『グルの寝台を犯す者は, 何百回となく草, 灌木, 蔓草, 肉食動物, 牙を持つ獸, 残忍なことをする者の(母胎に入る)』

(2-4) 但し一概に『草木』と言っても, 両者の間には尚かなりの距たりがあった。『草』(tṛṇa)は『無価値』なものの標本として軽蔑されるが, 『木』(vṛkṣa)には既述の通りしばしば精霊が宿り, 又そこに身を寄せる者に庇護を与え, それは時に『利他行者』の模範となっている。

(2-4-1) 『草』(tṛṇa)が『無価値』の基準となっていた事は tṛṇavat, tṛṇaya-, tṛṇī-kṛ-, tṛṇāya man- (Pāṇini 2.3.17)の語法によって知られる。

trṇam brahmavidaḥ svargas trṇam sūrasya jīvitam (IS.2587)

『梵を知れる者にとり天界は草，勇士にとり生命は草なり』

asmān ayam atikramya trṇikṛtya ca saṃgatān ... (MBh.1.180.2)

『彼はここに集合せる我等をさておき，草と為して... 』

sati-vrate' gnau trṇayāmi jīvitam (Naiṣadhacarita 9.70)

『貞女の誓いの火に比すれば，生命は私にとり草... 』

(2-4-2) これに反して『樹木』は草と異なり，その多くの部分によって他を益する。葉，花，実，蔭，根，樹皮，木材のいずれを取っても然りである。

patra-puṣpa-phala-chāyā-mūla-valkala-dārubhiḥ

dhanyā mahirūho yebhyo nirāśā yānti nārthinaḥ (IS.3896)

『幸いなるかな，実に樹木は。そは人欲すれば，葉，花，実，蔭，根，樹皮，将又木材となりて，彼等の欲する所虚しからず叶えればなり』

酷熱の地インドにあって樹木による緑蔭の提供は就中強調された。

arāv apy ucitam kāryam ātithyam gṛham āgate

chettum apy āgate chāyāṃ nopasaṃharate drumāḥ (IS.573)

『家に訪れ来たる者には，たとえ敵人たりとも，客人の礼を尽くすべし。樹木はたとえそを伐採せんと近づく者にも蔭を惜しまず』

sva-sukha-nirabhilāṣaḥ khidyase loka-hetoḥ

pratidinam atha vā te sṛṣṭir evaṃ-vidhaiva

anudhavati paritāpaṃ chāyayā saṃśritānām

śamayati paritāpaṃ chāyayā saṃśritānām

(Śakuntala 5.6)

『己が楽しみ顧みなくて，日毎世のため身をば疲らす。さもあらばあれ，そは生まれつき，君に備わる徳にこそあれ。巨いなる木は，烈しき暑さ，己が頭に遮り支え，憩い求めて立ち寄る人に，木蔭涼しき影を惜しまず』(辻直四郎訳)

緑蔭の提供と果実をもたらず事は就中『利他』の代表とされた。

chāyāṃ anyasya kurvanti svayaṃ tiṣṭhanti cātape

phalanti ca parārthe ca nātma-hetoḥ mahādrumāḥ (IS.2307)

『大樹は自ら酷熱に耐えて他に蔭を作る。実を稔らすも他の為，自己

の為ならず』

更に、利他行は敷衍され、それは蔭、葉、洞、幹、花と全身（sarva-aṅga）
以て利他行を実践すると言われる。

chāyā-supta-mṛgaḥ śakunta-nivahair viṣvaviluptacchadaḥ
kīṭair āvṛta-koṭaraḥ kapi-kulaiḥ skandhe kṛta-praśrayaḥ
viśrabdhaṃ madhupair nipīta-kusumaḥ ślāghyaḥ sa ekas taruḥ
sarvāṅgair bahu-sattva-saṃgha-sukhado bhū-bhāra-bhūto' paraḥ
(IS.2309)

『蔭に鹿は憩いて眠り、鳥の群れ飛び来たりその葉啄む。洞には虫が
巢食い、枝に猿は拠り、蜜蜂は安らげく花に蜜を飲む。かの木は一本
にて全身もて多くの生き物を恵む。他は地の重荷たるのみ』

樹木の中でも梅檀の樹はその利他行就中顕著にして高貴な者の比喩となる。

apamānito' pi kulajo na vadati puruṣaḥ svabhāva-dākṣiṇyāt
na hi malaya-candana-taruḥ paraśu-prahataḥ sravet pūyam (IS.
401)

『生まれ良き者は品性高潔なれば、たとえ軽んじられるとも他を咎め
ず。マラヤの山の梅檀の樹は、斧に伐られるも膿を流さず』

sujano na yāti vairam para-hita-buddhir vināśa-kāle' pi
chede 'pi candana-taruḥ surabhayati mukhaṃ kuṭhārasya (IS.7099)

『利他の心ある善人は、死に臨むも恨む事なし。梅檀の樹は断ち切ら
れる際にも斧を芳香たらしむ』

(2-4-3) 人間の身体部分を樹木の各部分になぞらえる考え方は古く
Brhadāraṇyaka-Upaniṣad 3.9.28 (Horsch pp.155-6. Wezler 1987a p.343,
Rau 1986 pp.223 note 24)に見え、それは MBh.5.29.45-6にも継承される
が、⁸⁾ 他面Aśvattha 樹は古くKāṭhaka Upaniṣadに『梵樹』(brahma-vṛkṣa)
と称され、宇宙の比喩に用いられた(Zaehner p.161, Maliner pp.346-7)。

III

(3-1) 枯渇して自ら朽ち果てた木は既に『生命なきもの』とされたが、こ

の様に利他行を実践して生きている『生木』(a-śuṣka druma) を伐り倒すこと (avapātana) は、たとえそれが燃料の為であっても、それは生命を奪う行為としてマヌ法典に『準大罪』(upapātaka) の一つに数えられた (MS.11.64)(Sternbach p.341)⁹⁾。同様に果樹 (phalada vṛkṣa) 及び花をつけた (puṣpita) 灌木 (gulma), 蔦(valli), 蔓草(latā), 植物(virudh)も生命あるものと考えられていたから、それらを伐採する際にはリグ・ヴェーダの詩節を百回唱えるべし(japyam ṛk-śatam) とも言われる (MS.11.142=VS. 50.48=YS.3.176)¹⁰⁾。樹木を伐採する場合には特定の祭祀が催されねばならなかった事も、古典インドの文献と伝える所である (Gupta pp.9-11)。これらの規定は、樹木が常に成長繁茂する『生命』を宿している事を物語っている。

(3-2) この様に内に生命を宿す草木は、根から肥沃な土壤の水分を吸収し、太陽光線を浴びて成長するが、一切の生物に不可避な『生住滅』を免れず、草木も幼児期、青年期、老年期を経験する (Tarkarahasyadīpikā p.157, Wezler 1987a p.343 note 89, Schmithausen 1991 p.87 note 492)。かくて草木は種子から発芽し、莖や枝が伸びて葉を繁らせ、花を咲かせ、実を結んで枯れてその生涯を終わる。その間に彼等は時に病気に罹り、その結果枯死する事もあり、又回復する事もある。そのサイクルは植物によって異なり、一年性の草から、人間の寿命を遙かに越えて何百年も生きる樹木もある。

この様に樹木は内に『生命』を宿しているが、それなら彼等は人間や動物と同じ様に知覚を有し、苦楽を経験しているのであろうか。我々が生木の伐採を見るに忍びないのは、彼等が実際に苦痛を経験する故であらうか。若し彼等が知覚を有するのであれば、植物は一体如何なる感覚器官を具えているのであろうか。古代インド人はこの種の疑問を提示して、植物を観察していた。

(3-3) 先ず草木に意思や知覚があるか否かは古くから文法学者の間で論ぜられたが、それは就中求欲法(Desiderative)の語幹形成(Pāṇ.3.1.7)においてであった。即ち『犬が将に死なんとす』(śvā mumūrṣati), 『堤が将に決壊せんとす』(kūlaṃ pipatiṣati), 『石は将に転がり出さんとす』(aśmā

luluthiṣate)などの『将に... せんとす』の構文にあつて、無生物の『堤』や『石』にも求欲法に見られる『意欲』があるか否かの議論が展開されたのである (sarvasya vā cetanāvattvāt)(Speijer p.66, Thieme p.377 note 5, Wezler 1986 pp.431ff.)。

(3-4) ヒマワリ等の大輪が太陽の進行に従つて向きを変えて行く事(suvarcalā ādityam anu paryeti) はそれが光線を感知している故であり、植物に固有の『向日性』『向光性』は彼等が感覚器官を有する証拠であると文法学者は考えた。又、或る草は『俯いて眠る』(śiriṣo' dhaḥ svapiti)と言われ、又 lajjālu という草はその語源の示す通り羞恥心を持つとも言われる。その知覚は後述する様に主として『触覚』(sparśa) のそれであつた。これらの事実は古代のインド人がこの種の科学的観察に長けていたことを教えている(Thieme pp.315-317, Rau 1986 p.223, Wezler 1987 p.328, Slaje 1989 p.152)。

(3-5) 蓮(padma)等は早朝に開花し、Ghoṣātaki等は薄暮(samdhya), 夜蓮(kumuda)等は月の出(candrodaya)を待つて開花する。Śamī樹は雨雲の接近によつて樹液を流し(tathāsanna-megha-pravrṣṭau śamyā avakṣaraṇam), Lajjālu等は手等との接触により葉が収縮する(hastādi-saṃsparśāt patra-saṃkocādikā parisphuṭā kriyopalabhyate)。実を結ぶ一切の樹木(vanaspati)は特定の季節にのみ果実をもたらす。これらの樹木の働きは彼等が知性(cetana)を有する証拠であると哲学者は論じていた(Tarkarahasyadīpikā p.158, lines 3ff.)。

IV

(植物の感官)

この様に植物にして知覚を有するのであれば、彼等は如何なる感覚器官を具えているのであろうか。

(4-1) 仏典で植物は『一根の生』(ekindriya jiva)として言及されているが、仏教徒自身がその様に考えていた訳ではなかつた。律蔵はそこに述べられる規定のよつて来る所以を説明する中でしばしば『一根の生』の語を出す。例えば『雨安居』の規定は、草木の成長繁茂する雨季に外出すると、それ

は草木の生命を奪うものであると他の人々から非難されるから、この規定が成立したと言われる類である (Vinaya 1.137.5-9, cf.12-15)。同様に草を編んでサンダルを作ったり (Vinaya 1.189.12-15)、無闇に木を伐採する事 (Vinaya 3.155.33-156.2)、地面に穴を掘る事 (Vinaya 4.32.25-28) も『一根の生』を害する所以であると言われた。ここに『一根の生』を説いていた者 (jīva-saññino hi bhikkhave manussā rukkhasmim, Vinaya 1.189.23-24) が誰であったかは判明しないが (Wezler 1987b p.126)、恐らくはジャイナ教徒であったと思われる。『一根』が『触覚』である事はジャイナ教の説く所 (Jaini 1979 pp.108-111, Schmithausen 1991 p.81) である故である。

但し、仏教に於ける草木観は微妙な問題を含んでいる。若し植物にして動物と同様苦楽を知覚し、靈魂を有するのであれば、動物の肉を食する事を排して、植物を食することを勧める『菜食主義』はその立論の根拠を失うこととなる。そこに『動物』と『植物』を差別する根拠が立てられねばならない。歴史的に見ても変遷があり、又出家と在家ではその規定の重みが自ずから異なっていたと思われるが、初期の出家修行者の間には『植物』をも憐れむ心ばえがあったであろうと思われる (Schmithausen 1991 pp.69 ff.)

(4-2) しばしば学者が引用するように (*locus classicus*, Wezler 1987b p.124), (Kane II p.895, Seal p.176, Hopkins 1910 p.7, 1924 p.228, Frauwallner 1953 pp.125ff., Hacker p.86, Misra p.181, Wezler 1987a pp.335ff., Slaje 1989 p.151, Schmithausen 1991 p.87 note 493), 叙事詩 Mahābhārata には草木が『五根』を具えるとなす章句が見出される (MBh.12.177)。この種の論述をなすよりは、梵文原典の翻訳を出した方がよいので、以下に関連部分の邦訳を試みる。

『暑さによって葉の凋んだ樹木の樹皮、実、花も寒さによって又凋む。それ故に樹木には触覚がある。(11)

風、火、雷の音により実も花も凋んでしまう。音は耳で聞く。それ故に樹木は聴いているのである。(12)

蔓草は樹木に絡みついて四方に伸びる。眼のない者が道を探す事は出来ない。それ故に樹木は見ているのである (13)

快不快(or 各種) の匂いや各種の香により健康になって花を咲かせる。それ故に樹木は匂いを嗅いでいるのである(14)

病んだ樹木が足(根) によって水を飲むことが観察される。そして回復する故に、樹木には味覚があるのである(15)

ストロウで人が水を吸い上げる様に、樹木は足(根) から風の力を借りて(水) を(吸い上げて) 飲んでいる(16)

苦楽を経験し、伐られても再生する故に、私は樹木に生命(jīva)を見る。彼等は感覚なき者(acaitanya) ではない(17)

MS.1.49 に言う様に、それは antaḥ-samjñā を有し、鈍い (stabdha)ながら、苦楽を享受するものであった(Medhātithi ad MS, I, 49, Müller pp.35-36, Wezler 1987b)。

V

(樹木開花時の異常嗜好)

植物が『一根の生』として仏典に言及され、叙事詩には眼耳鼻舌身の五官を有して『視覚』『聴覚』『嗅覚』『味覚』『触覚』の知覚を有する事には上に見た通りであるが、植物、就中樹木が知覚を有して、人間の或る種の働き掛けに反応するとなす考え方も古代インドに存在した。それは dohada と呼ばれる現象である。

あたかも腹に子を宿した妊婦が異常嗜好を持つように、樹木も花を咲かせる直前に特別な嗜好を持つと考えられていた。それは梵語で dohada (Lüders pp.44-47, Roth p.37 note 40)と謂われた。その中でも Aśoka樹と Bakula 樹は就中有名で、前者は美女の足蹴りにより (Rau 1986a p.193, Roy, Schmithausen 1991 p.87 note 492), 又後者は彼女の口に含んで注ぎかける酒によって開花すると言う (Rau 1986a p.193)。梵文学にあって最も有名な例は Kālidāsa の戯曲 Mālavikāgnimitra の第三幕にみられるが、今一例を彼の抒情詩 Meghadūta より取れば次の如くである。この抒情詩は流滴の境遇にある夜叉が、故郷の妻を思ってその方角に流れ行く雲に託して愛妻にメッセージを送るを主題としている(Coomaraswami p.86-7)。

『クラバカに囲まれ、マーダヴィー草に覆われたるあずまの側近く、

その芽揺らめく真紅のアソカ樹と、愛らしきケーサラ樹はそこ（＝我が家の庭）に在り。前者は我と共に、汝の女友達（＝我が愛妻）の麗しき足を望み、後者は dohada に託つけて彼女の口酒を待つ』

ここに別離中の妻の足に触れ、彼女との接吻に思いを馳せる夜叉は、この二樹にこと寄せて己が思いを吐露している。この二樹（AśokaとBakula）は梵文学にしばしば繰り返される所であるが、この他にも幾つかの樹木が開花に先立って異常嗜好を訴えていた事が複数の文献によって知られている。上記の詩節への注釈（Mallinātha）に言う。

『プリアングは婦人の触れる事により開花し、バクラは一杯の酒を注ぐ事により、アソカは足蹴りにより、チラカは凝視により、クラバカは抱擁により、マンダーラは冗談を交わす事により、チャンパカは高笑いする事により、チュウタは口の息（を吹き掛ける事）により、ナメールは歌（を歌ってやる事）により、カルニカーラはその前で踊る事により開花する』（Roth p.33）。

これを表示すれば、以下の如くである。

1. Priyaṅgu	sparśa	（触れてやる）
2. Bakula	sīdhu-gaṇḍūṣa-seka	（酒を吹きかける）
3. Aśoka	pādāghāta	（足で蹴る）
4. Tilaka	vikṣaṇa	（見つめてやる）
5. Kurabaka	ālingana	（抱いてやる）
6. Mandāra	narma-vākya	（愉快的な会話冗談）
7. Campaka	paṭu-mṛdu-hasana	（笑ってやる）
8. Cūta	vaktra-vāta	（息をかける）
9. Nameru	gīta	（歌ってやる）
10. Karṇikāra	puro nartana	（その前で踊ってやる）

この様にこれら十種の樹木は、それぞれ美女の特別の動作に反応して花を咲かせると言われる。開花直前の樹木はいわば出産直前の妊婦に似て、開花の故に特別の嗜好を有し、それを満たしてやる事によって開花が促される。多少の出入りがあるが、同様な十種リストは『庭園学』の書である

Vṛkṣāyur-veda にも見られ (Das 1988 p.33), その中の6は哲学の注釈文献 Tārkarahasyadīpikā (p.157 lines 7ff. Wezler 1987a p.343 note 89, Schmithausen 1991 p.87 note 492), 又その中の4は後世の辞書 Lokaprakāśa (Weber, Bloch) にも言及されている。本邦の『花咲翁』の灰にも似た樹木開花にまつわる信仰が古くインドに存在した事が知られる。

ここに美女の歌舞音曲, 会話, 微笑のみならず, 彼女の愛撫, 抱擁, 流し眼に反応して花を咲かせる樹木はもとより『男性』と表象されているわけであるが, これによっても樹木に『視覚』(vikṣaṇa, hasana, nartana), 『聴覚』(narma-vākya, gīta), 『嗅覚』(vaktra-vāta), 『味覚』(śidhu-gaṇḍūṣa-seka), 『触覚』(sparśa, pādāghāta, ālingana) があり, 彼等が五官 (indriya) を具えていた事が知られる。

VI

(樹木の階級)

女性による抱擁は上のクラバカ樹に限られなかった。叙事詩には仏典に菩提樹, 優曇華と漢訳される Aśvattha と Udumbara 樹が女性の抱擁の対象となっている。但しこの場合『抱擁による生産性』は樹木の開花に結果するのではなく, 女性の妊娠出産に関している。ここに樹木は『生命力付与』の契機となり, 古く『樹木の擁する生命力』に纏わる信仰のあった事を窺わしめる。子宝を得る為に樹木に祈祷する例は法句経注釈にも見える (Coomaraswami p.68, Burlingame Buddhist Legends 146 and p.85 Jātaka 509)

王族武士階級を殺戮して21回に及び, 血の大池を造ったと伝えられる勇猛なバラモン Paraśurāma の誕生と, 王族武士階級に生まれながらバラモンの様に苦行に身を委ねて, 挙げ句の果てにバラモン位を得た Viśvāmitra の誕生を説明的に物語る叙事詩の物語 (MBh.3.115) に次の様なものがある (Coomaraswami p.84, Hopkins 1910 p.351)。

その昔, Gādhiと名付ける王は子なきままに退位して森に退いたが, 森にあって彼は美女 Satyavatī を儲けた。彼女の美貌にひかれたバラモン Rciika は彼女に求婚したが, 娘を与える事に不承であった父は彼に凡そ調達不可

能と思われる結納の印として、片耳のみ黒い白馬千頭を要求した。思いあぐんだ R̥cika は、しかし、Varuṇa 神の加護によって結納を用意する事を得、彼はめでたく彼女を娶ったが、時経て新婚の兩人を訪れた同族の長老は嫁の歓待に満足して『願い事』(vara)を叶えてやろうと提案した。彼女は子宝を欲したが、それを耳にした彼女の母、即ち Gādhi の妻は、自分にも息子の授からん事を切望したから、両女の願いを容れた長老は両女に二本の樹木を抱擁する事を勧めた。即ち、若きバラモンの嫁 Satyavati は Udumbaraの木を、彼女の母、王族の妻は Aśvattha の木を抱擁せよというのである。然るに、両女は長老の言いつけを守らず、密かに抱擁する木を互いに交換したので、それを知った長老は次の様に予言する。

『嫁は武士の如きバラモンを、その母はバラモンの如き武士を出産せん』。

驚いた嫁は長老に跪いて、この様な恐ろしい事は我が子の時代にではなく、孫の時代にのみ実現する様に懇願した。その結果、嫁は Paraśurāma の父 Jamadagni を産み、その母は Viśvāmitra を産んだというのである。

この物語は叙事詩の他の部分にも幾分の増広を経て言及されるが、ここに Aśvattha 樹は王族武士、Udumbara 樹はバラモンに対応する樹木の如く言及されている。従ってバラモン女にして Aśvattha、王族武士の女にして Udumbara を抱く時、武士らしきバラモン、バラモンらしき武士が誕生する事となる。ここに文脈は樹木にも身分階級のあった事を指示しているものの如くであるが、それを立証するには尚複数の資料の支持が必要である。

前章に於いては、樹木が美女の抱擁、接吻を要求し、後者が前者の異常嗜好を満たす事によって樹木は開花したが、本章に於いては逆に女性が樹木を抱擁して、その妊娠出産を成就している。従って同じく抱擁といっても、生産活動を促す側は互いに異なっているが、ここに男性としての樹木と人間の女性との間には、互いの生産活動に密接な関係のあった事が確認される。

VII

（植樹の功德）

上述の諸章句は樹木が『男性』である事を前提としているが、それは樹木を『息子』（putra）となしている章句によっても立証されるところである。以下に『植樹』の功德を謳う叙事詩の一節（MBh.13.99）を紹介して本稿の締め括りとする。

以下に植樹（の功德）に就いて語らん(22)

不動物は6種と言われる。木、灌木、（木に纏う）蔓、（地に這う）かずら、竹、草(23)

これら樹木育成（vṛkṣa-ropa）の功德（guṇa）とは、現世にて名声（kīrti）、来世にめでたき果報（śubha phala）なり（24）

現世に名（nāma）を博し、来世に父祖と共に讃えられる。神の世界に赴く時、その名は不滅となる。（25）

植樹者（vṛkṣa-ropin）は過去未来にわたり、父の一族（pitṛ-vaṃśa）を救えば、すべからく人は樹木を育成すべし(26)

これら樹木は彼の息子なり、疑い無し。（植樹者は）来世に天界を得、又不滅の世界を得(27)

樹木は花（puṣpa）にて神（deva）、実（phala）にて父祖（pitṛ）、蔭（chāyā）にて客（atithi）を歓待供養（pūjayanti）なす(28)

キンナラ、ウラガ、羅刹、神、ガンダルヴァ、人間、聖仙も皆樹木に拠る（śrayanti）(29)

樹木は花をつけ、実をつけて人間をこの世に於いて喜ばせ（tarpayanti）、来世にても樹木は息子の如く植樹者（vṛkṣa-da）を救う（tārayanti）(30)

されば幸福を欲する者（śreyo'rthin）は常に井戸の側に樹木を植え、息子の如く守護なすべし（putravat paripālya）。樹木は正しく息子と伝えられる（31）

再生族にして井戸を掘り（taḍāgakṛt）、木を植え（vṛkṣa-ropin）、祭式を催し（iṣṭayajña）、不妄語を實踐なす（satyavādin）者は天界に於いて讃えられる（32）

されば人は井戸を掘り、庭を造り、各種祭式なし、常に不妄語を实践
なす者たるべし（33）

ここに樹木は『息子』と称せられ、あたかも『息子』（putra）が put と名
ずける地獄から父祖を救い出し（trāyate）彼等に天界を約束保証する様に、
植樹してこの世に樹木を残す者には天界が約束されていた。植樹は『井戸
掘り』『祭式』『不妄語』と共に『功德』の一に数えられていた¹¹⁾。同様な
ことは Viṣṇusmṛti 91 にも謳われる（Sternbach 1965 p.338）。

樹木を植える者にとり、樹木は来世に息子となる(4)

植樹者はその樹木の花（を供える事）により神々を悦ばす(5)

又その果実にて客人を悦ばす(6)

又その蔭によりて訪れる者を悦ばす(7)

雨期にはその水にて祖先を悦ばす¹²⁾ (8)

ひとたび植樹すれば、樹木は植樹者たる人間の寿命を遙かに越えて幾百年
も生き続ける。植樹者はその意味で樹木の親となり、一方樹木は息子となっ
て親の在世中は花と実を以て彼を喜ばすのみならず、その死後も彼に養育
扶養の恩義を感じて植樹者の来世を見守る。同じく樹木を慈しみ、植樹の
功德を説いても、インドの文献は植樹者と樹木の間親子関係を認め、樹木
に息子と同様の祖先祭執行資格を賦与していたのである。

(註)

1. Bhīma の長兄批判の文言中にも次の如く言われている。
 yadi samnyāsataḥ siddhiṃ rājan kaś cid avāpnuyāt
 parvatās ca drumās caiva kṣipraṃ siddhim avāpnuyuḥ (24)
 ete hi nitya-samnyāsā dṛśyante nirupadravāḥ
 aparigrahavantaś ca satataṃ cātma-cāriṇaḥ (MBh.12.10.25)
2. meghā vṛkṣā nadināṃ ca jalaughāḥ sajjanā janāḥ
 paropakaraṇārthāya daivāc catvāro nirmītaḥ (IS.4975)
3. mṛdaṃ gāṃ daivataṃ vipraṃ ghṛtaṃ madhu catuspatham
 pradakṣiṇāni kurvīta prajñātāmś ca vanaspatin (MS.4.39)
4. kalpa-vṛkṣaṃ tato gatvā kṛtvā taṃ triḥ pradakṣiṇam
 pūjayet parayā bhaktyā mantreṇānena taṃ vaṭam (12)
 om namo vyakta-rūpāya mahā-pralaya-kāriṇe
 mahad-rasopaviṣṭāya nyagrodhāya namo 'stu te (13)
 amaras tvam sadā kalpe hareś cāyatanaṃ vaṭa
 nyagrodha hara me pāpaṃ kalpavṛkṣa namo 'stu te (14)
 bhaktyā pradakṣiṇam kṛtvā natvā kalpavaṭam naraḥ
 sahasā mucyate pāpāj jirṇatvaca ivoragaḥ (15)
 chāyāṃ tasya samākramya kalpavṛkṣasya bho dvijāḥ
 brahmahatyāṃ nara jahyāt pāpeṣv anyeṣu kā kathā (Brahmapurāṇa
 57.16)
5. yāniha vṛkṣe bhūtāni tebhyaḥ svasti namo 'stu vaḥ
 upahāraṃ gṛhītvemaṃ kriyatāṃ vāsa-paryāyaḥ (BS.42.17-8)
6. yāniha bhūtāni vasanti tāni balim gṛhītvā vidhivat prayuktam
 anyatra vāsam parikalayantu kṣamantu tāny adya namo 'stu tebhyaḥ
 (BS.58.11. Cf. Goudriaan p.99).
7. apakrāmantu bhūtāni devatās ca saguhyakāḥ
 yuṣmabhyaṃ tu balaṃ bhūyaḥ somo diśatu pādapāḥ (89)
 śivam astu mahīputrā devatās ca saguhyakāḥ
 karmaitat sādhaiṣyāmi kriyatāṃ vāsa-paryāyaḥ

(Mayamata 15.90, Dagens p.202, Cf.also Kramrisch p.114)

8. MBh. 全体も樹木 (druma) に譬えられる。

saṃgrahādhyāya-bijo vai paulomāstika-mūlavān
 saṃbhava-skandha-vistāraḥ sabhāraṇya-viṭaṅkavān
 araṇi-parva-rūpādhyo virāṭodyoga-sāravān
 bhīṣma-parva-mahāsākho droṇa-parva-palāśavān
 karṇa-parva-citaiḥ puṣpaiḥ śalya-parva-sugandhibhiḥ
 stri-parva-aiṣika-viśrāmaḥ śānti-parva-bṛhat-phalaḥ
 aśvamedhāmṛta-rasas tv āśramasthāna-saṃśrayaḥ
 mausala-śruti-saṃkṣepaḥ śiṣṭa-dvija-niṣevitaḥ
 sarveṣāṃ kavi-mukhyānām upajīvyo bhaviṣyati
 parjanya iva bhūtānām akṣayo bhārata-drumaḥ
 (MBh.1 Appendix 1 47-56, p.885)

9. indhanārtham aśuṣkāṇāṃ drumāṇām avapātanam
 ātmārtham ca kriyārambho ninditānnādānam tathā (MS.11.64)

10. phaladānāṃ tu vṛkṣāṇāṃ chedane japyam ṛk-śatam
 gulma-valli-latānāṃ ca puṣpitānāṃ ca vīrudhām (MS.11.142)
 Cf. kṛṣṭa-jānām oṣadhīnām jātānām ca svayaṃ vane
 vṛthālambhe 'nugacched gāṃ dinam ekaṃ payo-vrataḥ
 (MS.11.144)

11. ata ūrdhvaṃ pravakṣyāmi vṛkṣāṇāṃ api ropāṇe (22cd)
 sthāvarāṇāṃ ca bhūtānāṃ jātayaḥ ṣaṭ prakīrtitāḥ
 vṛkṣa-gulma-latā-vallyas tvaksārās tṛṇa-jātayaḥ (23)
 etā jātyas tu vṛkṣāṇāṃ teṣāṃ rope guṇās tv ime
 kīrtiś ca mānuṣe loke pretya caiva phalaṃ śubham (24)
 labhate nāma loke ca piṭṛbhiś ca mahiyate
 deva-loka-gatasyāpi nāma tasya na naśyati (25)
 atitānāgate cobhe piṭṛ-vaṃśaṃ ca bhārata
 tārayed vṛkṣa-ropī ca tasmād vṛkṣān praropayet (26)
 tasya putrā bhavanty ete pādapā nātra saṃśayaḥ

para-loka-gataḥ svargaṃ lokāṃś cāpnoti so' vyayān (27)

puṣpaiḥ sura-gaṇān vṛkṣāḥ phalaiś cāpi tathā pitṛn

chāyayā cātithiṃs tāta pūjayanti mahīruhāḥ (28)

kinnaroraga-rakṣāṃsi deva-gandharva-mānavāḥ

tathā ṛṣi-gaṇāś caiva saṃśrayanti mahīruhān (29)

puṣpitāḥ phalavantaś ca tarpayantiha mānavān

vṛkṣadam putravat vṛkṣās tārayanti paratra ca (30)

tasmāt taḍāge vṛkṣā vai ropyāḥ śreyorthinā sadā

putravat paripālyās ca putrās te dharmataḥ smṛtāḥ (31)

taḍāga-kṛd vṛkṣaropi iṣṭa-yajñāś ca yo dvijaḥ

ete svarge mahīyante ye cānye satyavādinaḥ (32)

tasmāt taḍāgaṃ kurvīta ārāmāṃś caiva ropayet

yajec ca vividhair yajñaiḥ satyaṃ ca satataṃ vadet

(MBh.13.99.33 = Bombay 13.58. Kane 2 p.894-5.)

12. vṛkṣāropayitur vṛkṣāḥ paraloke putrā bhavanti (4)

vṛkṣa-prado vṛkṣa-prasūnair devān pṛṇayati (5)

phalaiś cātithin (6)

chāyayā cābhyāgatān (7)

deve varṣaty udakena pitṛn (Viṣṇusmṛti 91.8)

Bibliography

- Bloch 1914: J.Bloch, *Un manuel du scribe cachemirien au XVII^e siècle, Le Loka-prakāśa*, attribué à Kṣemendra (Paris)
- Coomaraswami
1993: A.K.Coomaraswami, *Yakṣas, Essays in the Water Cosmology*, New Edition, Revised and Enlarged (New Delhi)
- *Dagens
1994: B.Dagens, *Mayamatam, Treatise of Housing, Architecture and Iconography* (Delhi)
- Das 1988: P.R.Das, *Das Wissen von der Lebensspanne der Bäume, Surapāla's Vṛkṣāyurveda* (Stuttgart)
- Frauwallner
1953: E.Frauwallner, *Geschichte der indischen Philosophie* 1
1956: ----- II (Salzburg)
- *Goudriaan
1965: T.Goudriaan, *Kāśyapa's Book of Wisdom, Kāśyapa-jñāna-kāṇḍaḥ*, (The Hague)
- Gupta 1991: S.M.Gupta, *Plant Myths and Traditions in India* (Second revised edition [New Delhi])
- Hacker 1963: P.Hacker, "Two Accounts of Cosmogony," *Jñānamuktāvalī (Festschrift J.Nobel)* (New Delhi) pp.77-91.
- Halbfass 1991: W.Halbfass, *Tradition and Reflection* (Sury)
- Hopkins
*1910: E.W.Hopkins, "Mythological Aspects of Trees and Mountains in the Great Epic," *Journal of the American Oriental Society* 30 pp.347-374.
*1924: ----- "A Buddhist Passage in Manu," *Journal of the American Oriental Society* 43 pp.244-6.
1915: ----- *Epic Mythology* (Strassburg)

- 1924: ----- *Ethics of India* (New Haven)
- Horsch 1966: P.Horsch, *Die vedische Gāthā- und Śloka-Literatur* (Bern)
- Jaini 1979: P.S.Jaini, *The Jaina Path of Purification* (Berkeley)
- 1980: ----- "Karma and the Problem of Rebirth in Jainism,"
Karma and Rebirth in Classical Indian Tradition, ed.,
by W.D.O'Flaherty (Berkeley) pp.217-238.
- Kane 1941-1953: P.V.Kane, *History of Dharmasāstra II-IV* (Poona)
- *Kramrisch
- 1976: S.Kramrisch, *The Hindu Temple* (Delhi Reprint).
- Lüders 1940: H.Lüders, *Philologica Indica* (Göttingen)
- Maliner 1996: A.Maliner, *Rājavidyā, Das königliche Wissen um Herrschaft und Verzicht* (Wiesbaden)
- Misra 1974: A.Misra, "Consciousness in Plants," *Indian Journal of History of Science* 9, pp.178-184.
- Müller 1955: R.F.G. Müller, "Altindische Embryologie," *Nova Acta Leopoldina* 115-117 (Leipzig), pp.1-52.
- Rau 1986: W.Rau, *Naturbeobachtung und Handwerkskunst im vorislamischen Indien* (Stuttgart)
- 1986a: ----- "Poetical Conventions in Indian Kāvya Literature,"
Adyar Library Bulletin 50 pp.191-197.
- Roth 1986: G.Roth, *Indian Studies* (Delhi)
- Roy 1987: U.N.Roy, "dohada -- A Folk-Custom of Ancient India,"
History and Culture, B.P.Sinha Felicitation Volume
(Patna) pp.104-111.
- *Schlingloff
- 1993: D.Schlingloff, "The Oldest Image of a Garuḍa in Indian Painting," *Chowkhamba Sanskrit Series Office, Centenary Commemoration Volume (1892-1992)* ed., by S.Malaviya (Varanasi) pp.379-385.

Schmithausen

1985: L.Schmithausen, "Buddhismus und Natur," *Die Verantwortung des Menschen für eine bewohnbare Welt im Christentum, Hinduismus und Buddhismus* (Freiburg) pp.100-133.

1991: ----- *The Problem of the Sentience of Plants in Earliest Buddhism* (Tokyo 1991)

1995: ----- "Mensch, Tier und Pflanze und der Tod in den älteren Upanishaden," *Im Tod gewinnt der Mensch sein Selbst*, herausgegeben von G.Oberhammer (Wien) pp.43-74.

Seal 1958: B.N.Seal, *The Positive Sciences of the Ancient Hindus* (Delhi Reprint)

Slaje 1989: W.Slaje, "Bewusstsein und Wahrnehmungsvermögen von Pflanzen aus hinduistischer Sicht," *Der Orientalische Mensch und seine Beziehungen zur Umwelt*, Grazer Morgenländische Studien, herausgegeben von H.D.Galter und B.Scholz Band 2 Graz 1989, pp.149-169.

1993: -----, "Merkmale des Lebendigen: Zu einer naturphilosophisch begründeten Biologie in Bhāskarakaṇṭhas Cittānubodhaśāstra," *Journal of the European Āyurvedic Society* vol.3, 1993, pp.250-281.

Speijer 1886: J.S.Speijer, *Sanskrit Syntax* (Leyden)

* Sternbach 1965: L.Sternbach, "Legal Protection of Plants in Ancient India," *Juridical Studies in Ancient Indian Law*, Part I (Delhi) pp.338-346.

Thieme 1960: P.Thieme, "Beseelung in Sprache, Dichtung und Religion," *Paideuma* VII pp.313-324 (= *Kleine Schriften* pp.374-385)

* Viennot 1954: O.Viennot, *Le culte de l'arbre dans l'inde ancienne* (Paris)

Weber 1898: A.Weber, "Zu Kṣemendra's Lokaprakāśa," *Indische Studien*

- 18 pp.289-412.
- Wezler 1986: A.Wezler, "Cattle, Field and Barley: A Note on Mahābhāṣya 1.337.24-27," *Adyar Library Bulletin* 50, pp.431-477.
- 1987a: ----- "Bemerkungen zu einigen von Naturbeobachtung-zeugenden Textstellen und den Problemen ihrer Interpretation," *Studien zur Indologie und Iranistik* 13-14 pp.321-346.
- 1987b: ----- "On the term antaḥsaṃjñā-," *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute* 68, pp.111-131.
- 1995: ----- "Der Tod als Mittel der Entsöhnung," *Im Tod gewinnt der Mensch sein Selbst*, herausgegeben von G. Oberhammer (Wien) pp.97-140.
- Zaehner 1969: R.C.Zaehner, *The Bhagavadgītā* (Oxford).

Abbreviations and Texts

- BS :Bṛhatsaṃhitā, Sarasvatī Bhavan Granthamālā 9 (Varanasi 1968)
- IS. : O.Böhtlingk, *Indische Sprüche* (Osnabrück Reprint 1966)
- MBh. :Mahābhārata (The Poona Critical Edition)
- MS. :Manusmṛti (Nirnaya Sagar Press 1946)
- YS :Yājñavalkyasmṛti (Nirnaya Sagar Press 1949)
- Brahma-purāṇa :*Sanskrit Indices and Text of the Brahma purāṇa* by P. Schreiner and R.Söhnen (Wiesbaden 1987)
- Tarka-rahasya-dīpikā: *Ṣaḍ-darśana-samuccaya*, with Guṇartanas' Commentary Tarkarahasyadīpikā by Haribhadra, ed. by L. S uali (Bibliotheca Indica 167) (Calcutta 1986 Reprint) Vinaya :*The Vinaya Piṭakam* I - V, ed., by H. Oldenberg (Pali Text Society) (London 1964 Reprint)

（後記）

本稿は平成8-9年度、三菱財団研究助成金（『宗教と環境問題』）による研究成果の一部である。尚、Bibliographyの中に*印を付しているものは前掲英文論文脱稿後に筆者が新たに気付いて追加したものである。この中、T.Goudriaanの著作に関しては引田弘道博士の示教によった。記して感謝の意を表する。